アンドレ・マルロー綜合年譜 (III)

堀 田 郷 弘

は じ め に

本稿は「アンドレ・マルロー綜合年譜（Ⅰ）」(『城西大学教養関係紀要』第1巻第1号，1977年3月）および「年譜（Ⅱ）」(同誌第2巻第1号，1978年3月）に続くものである。「年譜」（Ⅰ）（Ⅱ）では，マルロー生誕の1901年から1922年まで編述したが，今回の（Ⅲ）では，1923年から1924年までをとり扱う。

資料とした文献については，すでに「年譜」（Ⅰ）と（Ⅱ）の序文に掲げておいたが，その後の約4年間にさらに貴重な文献が発表された。そのうちの主なるものを参考文献追加の意味で，次に掲げておく。

Catalogue de *"l'Exposition André Malraux"* (Chancellerie de l'Ordre de la Libération, Paris, 1977), Robert S. Thornberry『*André Malraux et L'Espagne*』(Lib. Droz, Genève, 1977), John J. Michalczyk『*André Malraux's Espoir: The Propaganda/Art Film and The Spanish Civil War*』(University, Mississippi, Romance Monographs, inc, 1977), Olivier Germain-Thomas『*Les rats capitaines*』(Eds. Libres-Hallier, Paris, 1978), Patrice Hovald『*Toutes ces années...et André Malraux*』(Eds. du Cerf, Paris, 1978), Alain Malraux『*Les marronniers de Boulogne*』(Plon, Paris, 1978), François Hébert『*Triptyque de la Mort*』(Les Presses de l'Université de Montréal, Canada, 1978), James R. Hewitt『*André Malraux*』(Frederick Unger Publishing Co. New-York, 1978), Frédéric J. Grover『*Six Entretiens avec André Malraux sur des Ecrivains de son temps* (1959–1975)』(Gallimard, Paris, 1978), RLM『*André Malraux 4*』(Minard, Paris, 1978),『*André Malraux et Le Japan Eternel*, アンドレ・マルローと永遠の日本』展カタログ（出光美術館・東京・1978), Clara Malraux『*...Et pourtant j'étais libre*』("Le Bruit de Nos Pas, VI", Grasset, Paris 1979), Jacques Mercanton『*André Malraux, L'homme au-dela de ses secrets*』(Eds. Bertil Galland, 1979), André Marissel『*La Pensée créatrice d'André Malraux*』(Privat, Toulouse, 1979), Guy Suarès『*Malraux, celui qui vient*』(Stock, Paris, 1979), Philippe et François de Saint-Chéron『*Notre Malraux*』(Albin Michel, Paris, 1979),『*André Malraux*』(Coll. Génies et Réalités, Hachette, Paris, 1979),「Revue d'Histoire Littéraire de la

France-André Malraux」(81 année, N° 2, mars/avril 1981, Armand Colin).

ただし，今回はマルローの第一回目のインドシナ滞在を扱っているので，マルローの著作である小説『*La Voie royale*』(1930) と『*Antiménoires*』(1972), Clara Malraux の自伝『*Le Bruit de nos pas*』の第2巻『*Nos vingt ans*』(Grasset, 1966), André Vandegans『*La jeunesse littéraire d'André Malraux*』(Pauvert, 1964), Walter G. Langlois『*André Malraux, l'aventure indochinoise*』(Mercure de France, 1967), などを主に使用していることをおことわりしておく。

年　　譜

年譜の左欄はマルローの生活を，中央欄はマルローについての文献を，右欄は関連する歴史的事項を示す。中央欄においては，マルロー著（ないし共著）の単行本は全て太字イタリックで，誌紙に発表の著作は普通のイタリックで，またマルローについての著作は全て，行頭をさげ，活字を小さくした。その他全体を通じて，単行本は『　』，誌紙は「　」で示し，（　）内は単行本の場合は出版社名，誌紙発表の場合は誌紙名と発行月日を記した。表中の①②…は脚註，(1)(2)…は文末の補註を示す。註の場合の文末の（　）は出典を示した。→邦訳は邦訳のあることを示す。

1923（大正12年）		
相変らず経済状態が悪く，生活費をうるため様々な計画をたてるが，いずれも成果があがらない。「保存の行き届いていない宝物」つまり未発見の考古美術財の発掘とその売却	*Charles Maurras*（『Mademoiselle Monk』par Ch. Maurras, Lib. Stock, p. 7-9)①	1月・フランス，ルール地方占領。
	4月 *Ménalque*（「Le Disque Vert」4-5-6, p. 19-21)② **5月** *MALICE, par Pierre Mac Orlan*（「N. R. F.」116, p. 836-7)③	4月・ローザンヌ会議，トコル共和国成立。

① 序文「シャルル・モーラス」。<Les Contemporains-Œuvres et Portraits du XXe Siècle>叢書の1冊として刊行されたモーラスの作品『*Mademoiselle Monk*』と『*Invocation à Minerve*』収録の書につけた序文。「理性は感性に対してはほとんど力を持たない。理性が他のものを変えうるのは，ただ感情の助けを借りる時だけである。こうした助けを，シャルル・モーラスはフランスに対する愛のうちに見つけたのである」「モーラスは，今日の最も偉大な知力を有するひとりである」。

② 評論「メナルク」。ジッドの『*Nourritures terrestres*』(1897) の主人公メナルクに語りかける形式のジッド批評。「メナルクよ，あなたの方法は先人たちとは違っています，それは到達点ではなく出発点です。あなたの方法が価値を持つのは，あなたが出かけようという意欲を示される場合だけです…私はあなたの友ジットが大変好きです，あなたより好きです」。

③ 書評「ピエール・マッコルラン著『悪意』」(Crès 刊)。「『悪意』は全くマッコルランの最も特異な作品である…彼は幻想小説家である…だが彼の幻想は想像力だけからもたらされたものではなく，変換から生じている」「その現代的登場人物と伝説的人物を不断に対比するところに大きな力があり，そこから現代的な登場人物が幻想化するのである」

を思いつき，シャムからカンボジアにかけての王道のクメール遺跡のことを調べ，インドシナ旅行の実現のため奔走する。		
最初のインドシナ旅行。		9月・関東大震災
公式の派遣の書類を得たのち，10月13日，クララと共に，マルセイユ港から出港，約4週間の船旅をへてサイゴンに上陸，友人シュヴァソンと合流し，アンコールへ向い，密林に埋れたバンテアイ・スレイ寺院の遺跡を発見し，その彫刻数点を発掘し，プノンペンにもどる。12月23日夜，石像密盗掘の嫌疑で，彫刻を押収され，マルローとシュヴァソンは下船させられた上，ホテルに監視つきで泊らされる。		「ウーロップ」誌，「文芸春秋」誌，「赤旗」紙創刊。 トロツキー『文学と革命』，山内義雄『仏蘭西詩選』。 バレス没。
1924（大正13年）		
夏頃まで予審裁判が行われた結果，正式に起訴され，7月マルロー，シュヴァソンに禁固刑の判決がなされる。上訴するが，その間クラ	7月～Campagnes des presses saïgonnaises et parisiennes pour et contre Malraux.① 8月・R.-L. Doyon「Plaidoyer pour Malraux」(「L'Eclair」, le 9)② A. Breton「Pour André Malraux」(「Nouvelles Littéraires」96, le 16)③	1月・孫文による第一次国共合作成立。 英・第一次労働党内閣

① サイゴンでは「L'Impartial」紙が遺跡保存と反マルローのキャンペーンをする。「Le Courrier Saïgonnais」紙は客観的報道をする。パリではクララの奔走の効があったのか，「Les Nouvelles littéraires」のマルロー擁護のキャンペーンを中心に，「Comœdia」，「L'Intransigeant」の諸紙も好意的な報道をするが，「L'Eclair」，「Le Matin」紙は反マルローの論調であった。

② 1920年頃からマルローが働いていた書店主で，「L'Eclair」紙8月3日号の記事「*Le poète André Malraux pillait les temples d'Angkor*」に対する抗議書簡として文芸欄主任 L. Treich に宛たもの。

③ マルロー擁護の最初の文。「詩的冒険，われわれの幾人かはまだ彼と共にそれを求めるものである…。かつてアポリネールを彼の関知しないジョコンダによって沈めようとしたように，この若者の姿に，その記憶に，冷淡にも泥を塗るようなことは許されない…われわれはいつまでもアンドレ・マルローの味方である，＜偶然の兄弟，風＞と呼ばれるものには決して彼をまかせないだろう」。

ラは帰国して，マルロー救済の運動をする。10月末上訴裁判の結果，2人は執行猶予となり，釈放され，11月サイゴンを発ち，12月初旬パリに帰る[1]。

9月・「Texte de pétition」 soussigné par Gide, Mauriac, Aragon et vingt autres (「Nouvelles Littéraires」 99, le 6)①

9月 *L'Affaire des Statues d'Angkor* (「L'Impartial」, le 16)②

Lettre ouverte de protestation à L'Impartial (「L'Impartial」 le 17)③

2e Lettre de protestation (「L'Impartial」 le 18)④

10月 *Lettre ouverte* (「Courrier saïgonnais」, le 6)⑤

11月 *Divertissement & Triomphe*—extrait d' *"Ecrit pour une idole à trompe"* (「Accords」 3-4, p. 56-61)⑥

11月・M. Arland 「André Malraux」 (「Accords」 3-4, p. 55)⑦

レーニン没，スターリンが継ぐ。

7月・ロンドン会議。

「シュールレアリスム革命」「文芸戦線」誌創刊。

ブルトン『シュールレアリスム第一宣言』，クローデル『繻子の靴』(19-)，トーマス・マン『魔の山』

カフカ，A. フランス，プッチーニ鉄斎没。

---

① マルロー救済の「請願書」は，M. アルランの努力によって，N. R. F. 系の作家23名の署名を集めたものである。

② 彫刻盗掘事件についての「L'Impartial」紙のインタビューで，マルローは研究調査をしただけであると説明している。

③ 9月16日付のインタビュー記事はマルローのことばを正確に記載していないとする抗議の公開書簡。「*M. Malraux proteste*」の見出しがつく。

④ 9月17日の抗議書簡の記載の仕方の不当さを抗議する「L' Impartial」の政治部長 H. de Lachevrotière 宛の二通目の書簡。見出しは「*M. Malraux proteste*」。

⑤ インドシナ旅行の理由を説明するマルローの公開書簡。

⑥ 散文詩「気晴し」と「勝利」は「ラッパをもつ偶像のための書」の抜粋と注がつけられているが，「気晴し」の部分はすでに1921年 Action 誌に発表された「*Journal d'un Pompier du Jeu de massacre*」の断篇の variante である。Accords 誌は1924年5月創刊の月刊文芸誌で，編集責任者は Arland, Stock 社より刊行されている。3-4号は10-11月の合併号。

⑦ ⑥の作品につけられた avertissement で，新人作家マルローを紹介するもの。

補註

(1) **第一回インドシナ旅行**（1923年10月～1924年11月）

出発まで——

クララ夫人の自伝によれば，当時マルローは2つの旅行計画をもっていた。一つはフランドルからスペインにかけてのサン・ジャック・ドゥ・ラ・コンポステル巡礼路探索であり，もう一つはシャムからカンボジアにかけの≪王道≫の探検旅行であった。ラングロワ氏によれば，マルローは1923年の夏か初秋の頃に突然アジア行きを決心したというが (Langlois, p. 5)，なぜアジアを選んだかという理由について3点あげている。まず，マルローがアジアに興味を懐いていたこと，次にマルローがアジアについて，とりわけその芸術についての知識を深めていたこと，最後にインドシナやシャムについての考古学的研

究の著作を読んだことである。さらに，ヴァンドガンは，マルローが東洋美術のギュメ美術館に通ううちに知己をえた2人の人物の影響を指摘している。それはギュメ美術館の Jules Hackin と，彼から紹介された東洋語学校 Ecole des langues orientales vivantes の理事でロシア語学者の Paul Boyer（1864—1949）である。とりわけ Hackin から与えられた極東や東南アジアについての知識，そして考古学の影響が大きいという（Vandegans, p. 217)。こうした理由に加え，当時経済的に困っていたマルローにとって，金儲けの目的もあった。クララによれば，マルローは次のように言っていたという「どこかカンボジアの小さな寺院に行き，立像を2，3つ手に入れ，それをアメリカに売れば，2，3年は金に困らずに暮すことができよう」（『*Nos vingt ans*』p. 112)。しかしそれだけではない。マルローが後年「<冒険>ということばは，1920年頃の文学者の世界では，大きな威光をもっていた」（G. Picon『*Malraux par lui-même*』p. 78-9）と書いているように，当時の風潮に裏打ちされた若き作家マルローの行動に対する形而上的な要請もあったと言えよう。アンコールのクメール遺跡についての知識のもとになったマルローの読書であるが，当時読みえた紀行記は Francis Garnier の『インドシナ探検旅行』*Voyage d'exploration en Indochine*（1873）か『シャム，カンボジア，ラオス王国の旅』*Voyage dans les royaumes de Siam, Cambodge et Laos*（1863）であり，また考古学的著作といえば Maréchal の『アンコール』*Angkor* ぐらいのものであった。しかしマルローの調査に最も役立った著作は，フランス統治下にあったハノイのフランス極東学院 Ecole Française d'Extrême-Orient の考古学部門の責任者 Henri Parmentier のバンテアイ=スレイの小寺院のクメール彫刻についての論文「インドラヴァルマン芸術」*L'Art d'Indravarman*（「Bulletin de l'Ecole Française d'Etrême-Orient」t. 19, 1919）と，Revue Archéologique 誌の「保存の行き届いていない宝物」*Trésors mal gardés* の表題にまとめられ記事（1922)，とりわけハーヴァード大学のフォグ美術館 Fogg Art Museum が入手したクメール芸術の作品につけられた D. W. Ross と A. K. Porter の解説である。

インドシナ探検を打ちあけられたマックス・ジャコブ M. Jacob が「マルローは東洋学者になり，遂にはクローデルのようにフランス学士院に行きつくことだろう。彼は教授席につくために生まれた人間だ」（1923年10月12日付カーンワイラー宛書簡；Langlois. p. 6）と言うほど，マルローは熱心な調査，研究をすすめた。一方，公式の派遣許可をうるため植民大臣 Albert Sarraut に申請し，許可をえた。同行者はクララ夫人と友人ルイ・シュヴァソン Louis Chevasson，出発はインドシナの雨期の終わるのを待ち，船旅に4週間かかるのを計算して，10月すぎと決めた。

インドシナ半島への船旅——

冒険への出発は1923年10月13日金曜日となった（Clara, p. 123)。マルローはクララと共に夕刻タクシーでパリのリヨン駅に向う。マルセイユ行きの汽車に乗る。シュヴァソンは2週間遅れて出発し，サイゴンで落ち合う約束である。マルセイユのジョリエット碇泊区よりアンコール号で出港。いよいよフランス，そしてヨーロッパの地を離れ「遙かなる地」アジアへ向う。当時アジアへの船旅がどのように考えられていたかを，クララは次のように説明している，「ヨーロッパの地とアジアの間には，夢の，ノスタルジーの，希望の，倦怠の，耐えがたい暑気の日々が横たわっていた…」（p. 119)。船は地中海を横切り，ポートサイドからスエズ運河に入る。シナイ山の姿を彼方に残し，紅海を下り，南の出口ジブチに至る。ここからは寄港することもなくインド洋を渡り，シンガポールへと向う。洋上，船倉で火災があり，船は2日遅れてシンガポールに着く。アンコール号はシンガポールで数日間碇泊するため，2人は費用のこともあり，別の船に乗り換えてインドシナに向おうと予定していたのだが，この遅着のため計画を変えざるをえなくなった。出港を待つ間マレーシアのペナンに行ったりする。やがて再び出港，そしてサイゴンに着く。遙かなるアジアの地に第一歩を踏みしめたインドシナ半島南端の大都市サイゴンには，約1カ月の船旅を経てのことであった。この長い船旅は，若い冒険者のふたりにとっても，「船，海，乗客たち，船員たち，光と闇がいつも規則正しくやって来る日々，船上の夜の闇の訪れは，臨終の苦悩の余裕さえ残してくれないかのように素早く，そして死のように不意にやってくる」（Clara, p. 127)，そうした日々であった。

「広く，紫色の花が岸を覆う河」を船はすすみ，サイゴン市に至る。初めて見るサイゴンは「魅惑の地方都市，市街は市松模様のように区劃され，中央大通りが一筋延び，さらに茶色ぽい丸い実をつけるタマリンドの樹々に縁どられた幅広い並木道が幾本か走る。公園は，緑濃く，火焔樹の朱がかった赤色に映えている」(Clara, p. 128)，そんな姿を見せていた。

しかし2人は，そのサイゴンの魅惑に浸っていられない。資金もとぼしくなり始めていた。冒険へ，すぐさま始動する。

≪王道≫に埋れた彫像を求めて——

マルローは，ただちに，密林の奥地への旅に必要な公式の訪問にとりかかる。まずはハノイにあるフランス極東学院とコンタクトをとる必要がある。マルローは，クララを残し，独り，船で，トンキン湾，ハイフォンからハノイ市へと入る。フランス極東学院は1898年末にインドシナ半島の考古学的，言語学的研究を目的として創立されたもので（P. Galante『*Malraux*』, p. 39)，マルローが派遣申請の目的としたクメール遺跡の調査のためには，是非情報や援助を仰がなければならない機関であった。当時の学院長はルイ・フィノ教授 Louis Finot で，その他 Paul Pelliot, Georges Cœdès, Henri Parmentier らの研究員がいた。知識の面では，「イーシュヴァラプラの寺院」を発表したフィノ院長，とりわけパリで読んだバンテアイ=スレイについての論文の著者パルマンチエ教授に協力を求めねばならなかった。しかし両名共学院を留守にしていたので待たねばならなかった。実際の学院との援助交渉は，マルローの小説『王道』*La Voie royale*（1930）に描かれているように，学院の権威という厚い壁との闘いになった。ともあれ最終的には，シャム地方のクメール芸術についての報告書および探検の利益を学院に提供するという約束書を交わし，パルマンチエ教授が途中のアンコールまで同行するという条件で交渉がまとまった（Vandegans, p. 222)。この間約1カ月トンキン地方にいなければならなかった。学院の支持をとりつけるや，マルローはサイゴンにもどり，シュヴァソンにも会い，3人で密林への冒険の旅の最終準備をする。

マルロー，クララ，シュヴァソンとアンコールまで案内するというパルマンチェ教授，それに現地のグザという案内人と，一行5名は，まず船でメコン河からトンレサープ川へとシェムリアープまでさかのぼり，そこで下船する。後は自動車そして徒歩でアンコール群まで行く。ここでパルマンチェ教授と別れ，あとは若者3人と現地案内人との密林の中バンテアイ=スレイへの旅となる。

バンテアイ=スレイ Banteaï-Srey とは「処女の砦」の意味であるが，1914年海軍士官 Desmazure が偶然に発見した以後は，1916年のパルマンチェ教授の研究とフィノ教授の報告があるのみで，全くの「失われた寺院」であった。「森の奥深く……フノンデイの北西3キロのところ，シェムリアープ川のストルムトムの右岸に，砂岩でできたモニュメントがある。その規模は小さいが，彫刻に関しては，どの作品にも比類なき完璧さ，素晴しい構成が認められる……」(「*Le temple d'Içvarapura*」p. 7-Laconture, p. 61）とフィノ教授は伝えている。

≪王道≫の旅は，ガイドのグザが先頭に立ち，3人の冒険者は馬にのり，4台の荷車，12名の工人が，幾日も道なき森の中を進むものであった。「幾世紀もの歳月によって解体されて，王道は，わずかに，石の一隅でじっと動かない何かひき蛙のようなものの両の眼ともに，これら朽ち果てた鉱物の塊りによって，やっとその存在を示していた」とマルローが小説で描いた≪王道≫の旅であった。バンテアイ=スレイに最も近い部落ロアールで寺院のことをたずねるが，村人のだれも知らないという。さらに森の奥へと2日旅をする。そして遂に彫刻の寺の遺跡を発見する。その発見の瞬間について，マルローとクララはそれぞれ次のように描いている。

マルローの小説『王道』——「案内人が人差し指をのばしたまま，微笑していた……みんなの視点につられて，その方角に頭をめぐらすと，かつては宏荘だったにちがいない門が壁の前方にはじまっていた。森になれた連中が眺めていたのは，門の隅柱の一つであった。それは廃趾の上にピラミッドのように立ち，その頂には，きわめて精密に彫られた王冠をかぶった砂岩の像が，脆そうに無傷でのっていた……クロードの怒りは消え，喜びが彼を浸し，誰に向けてよいのか分からぬ感情の湧き上がり，歓

喜，そしてすぐに茫然自失の感動がおそってきた。彼は，警戒心も忘れ，彫刻にとりつかれて，門の正面まで進んだ……」。

クララの自伝『私たちの20代』――「一番年かさの従者が，山刀をかかげて立ちどまっていた。門が繁みの中に開いていて，内には敷石の敷きつめられた小さな中庭が見えた。その奥に，一部崩れていたが，両側の壁はまだしっかりと残っていて，そこに飾り立てられ，彫刻がいっぱいにほどこされたバラ色の寺が建っていた。それは苔が装飾となっているような森のトリアノンであった。苔の模様の素晴しさをめでるのはわたしたちが最初めてではないにしても，その尊厳さを備えた優雅さに息をのんで見つめたのはわたしたちが初めてであろう。これまで見た磨かれ，美しく保存されてきたアンコールの寺々のどれにくらべても，この打棄てられた寺の方がはるかに感動をかき立てるものであった」（p. 149）。

この埋れた寺院は，シバを祀る寺で，三棟の聖殿，二棟の書庫，六棟の附属建物，さらに前庭のある三棟の附属建物からなるものであった。マルローらは，南聖殿に進む。そこはラテライト土の小部屋でつくられていて，階段は消滅していた。聖室の外壁は沢山のデバータス davātas 像で飾られてたが，マルローらはそれを7個の石にわけてはずした。1個の石はほぼ高さ50センチ，巾65―75センチのものであった。この仕事には2日間要したという（Vandegans, p. 224-6）。素晴しい成果を上げた一行は，喜びの帰路についた。12月23日の夜中，マルローらと彫刻をのせた河船メサジュリーがプノンペンに着く。すると公安官が2人船に乗り込んで来て，マルローらの荷物を調べ，彫刻を押収し，マルローとシュヴァソンを連行した。彫刻は，プノンペンのアルベール・サロー美術館のグロスリエ氏に引き渡され，マルローらは遺跡盗掘の嫌疑の本格的調査を待つまでとして，一旦釈放される。3人はホテル・マノリスに監視つきで泊まることになった。これは高等駐在省が，マルローとフランス極東学院との交渉の結果を不安に思い，要注意人物として監視していたからといわれるが，不運なことに丁度1923年10月から遺跡保護法が発効していたということもあった。1923年の大晦日のことでった。

遺跡破損および盗掘の裁判――

マルローとシュヴァソンに対する遺跡破壊と盗掘嫌疑の予審裁判のための調査が始まり，マルローらはサイゴン市から離れる許可申請を拒否され，裁判を待つ日々を送ることになる。事件はすぐ町の噂となって流れたが，週刊の「カンボジアの声」紙 L'Echo du Cambodge の1924年1月5日号の記事「アンコール遺跡の盗掘」*Pillage des ruines d'Angkor* によって公けにされる。だがヴァンドガンによれば，そのニュースは植民地行政府から流されたもので，このマルロー裁判における現地行政府の介入が，しかもマルロー有罪への世論操作とさえ推察される介入が認められるという。さらに3日後の1月8日の日刊紙「公正」L'Impartial の記事「遺跡の破壊と略奪者たち」*Vandales et pillieurs de ruines* における事実報道の内容と編集長 H. シュヴィニーのマルローに対する中傷の論調は，植民地行政府の操作がはっきりと浮んでくる。とりわけこの2紙の2つの記事以外には，6カ月後に行われる裁判の日まで，マルロー=シュヴァソン事件を報じた他紙の記事がないことをも注意すべきである，と指摘している（Vandegans, p. 28-9）。

予審裁判の実地調査が，まずパルマンチェ教授と助手のゴルブウによって行われ，さらに後からフィノ院長が加わる。教授達は1月17日バンテアイ=スレイの寺院におもむき，調査を終えて，2月14日サイゴンに戻る。予審の裁判官バルテはパリの警察にマルローとシュヴァソンの身元調査を依頼し，その報告を受けとる。6カ月の調査を経て，予審裁判は7月16日水曜日と17日木曜日に，プノンペンの軽犯罪法廷で開かれることになった。最初2人の被告人マルローとシュヴァソンの尋問が行われ，2人は正式にアンコール群の バンテアイ=スレイ寺院を飾る薄浮彫数点の 横領および歴史建造物の故意の破壊」の罪状で起訴された。審問は三度行われ，パルマンチェ教授ら3人のヨーロッパ人が証人として呼ばれた。裁判は，まずマルローが自己弁護し，自分が単なる冒険家ではなく，考古学的探検と調査の知識も能力も備えた研究者であると主張した。それは「カンボジアの声」紙が「本当の考古学講義」に出席しているようであったと報じているほど専門的であった。またシュヴァソンは，本件の計画は自分の考えのみによるものと主張した。16日の午後の法廷は，被告の罪状を証し立てる証人が証言をした。最初は

ドビゼで，被告２人が彼のバンガローに泊った時の行動を述べた。第二の証人はクレマズィである。彼はシェムリアープの行政府代表として２人を監視していて，２人が密林から戻った時直ちにプノンペンの当局に通報した，と述べた。第三の証人はパルマンチェ教授で，現地調査の結果，被告人たちが彫刻をはがすために遺跡の一部を壊わしたこと，彫刻を数点はがしたこと，その作業には数日要することを述べた。しかし最後に２人の素人研究者の遺跡探索における先見の明を賞讃した。最終の告発弁論と弁護論述は17日の午前に行われた。シュヴァソンの弁護士は，シュヴァソンがこれまで何ら非難されるところのない良き生き方をして来たことを訴えた。マルローの弁護士は，バンテアイ=スレイがこれまで植民地政府によって公式に歴史建造物として登録されていない以上，被告には指摘されるような違反の事実は成立しないと主張した。こうした口頭弁護で予審は終わり，判決を待つことになった。

判決は７月21日月曜日行われ，マルローは禁固３年とインドシナ滞在禁止５年，シュヴァソンは18カ月の禁固刑を下された。しかし２人は直に上告の手続きをとり，その裁判は９月22日と決められた。

マルロー救済の動きとマスコミ――

クララは起訴を免れたが，疲れと心痛のため病気になり，３月頃より入院し，３カ月病院で暮すことになる。その間，マルローの身元調査のため警察がクララの母の家を訪れたことから，マルローの逮捕が家族に知られ，クララは離婚をすすめる母の手紙を受けとったり（p. 171），またマルローとの気持のずれも味わったりする（p. 205）。しかし，マルローたちの真の相手が植民地政府であるという困難な状況を知るや，本国において救済運動をしようと決心した。予審裁判の数日前サイゴンを発ち，フランスに向う。８月７日マルセイユに着き，９日パリに戻るや，直ちに奔走し始めた。パリのフォンテーヌ街にブルトンを，またドワイヨン R.-L. Doyon を訪ねたり，オルレアンのマルローの父や，ラングルの近くにいたアルラン M. Arland に電報を打ち，また反植民地主義の弁護士のモナン Monin に電話をかけたり，様々に手を打つ。つまり文学関係の人々の助けでマスコミに訴えようとする作戦であった。というのは，マルローの真の敵である植民地政府は，事件の最初から「カンボジアの声」や「公平」紙などサイゴンのマスコミを利用していたからであり，それらがパリのマスコミのニュース源となっていたからである。

サイゴンでは，予審裁判が開かれると，事件発端の時と同じように，まず「カンボジアの声」紙が，６カ月の沈黙を破って，７月19日号で，マルロー=シュヴァソン裁判の模様を報じる。ついで判決の７月21日と22日と続けて，これまた同じ「公平」紙が，盗掘されたとする彫刻の写真を掲げた記事「アンコールの薄浮彫の盗掘」*Un vol de bas-reliefs à Angkor* を発表し，マルローとシュヴァソンへの非難をすると共に，７月22日号には政治部長ラシュヴロティエール自から筆をとっての記事「インドシナの芸術と考古学の宝を守ろう」*Protégeons les trésors artistiques et archéologiques de l'Indochine* で，遺跡保護のキャンペーンを始めた。「カンボジアの声」は７月26日にも判決とその正当性を報じている。

一方，パリでは，予審裁判と同じ７月17日に最初の報道が現われる。それはパリの文学新聞「コメディ」Comoedia 紙の記事「考古学発掘において」*Dans les Fouilles* である。この記事は，無名の詩人によるインドシナでの冒険を簡単に報ずるものであった。そして８月２日土曜日，午後に出る日刊紙の数社が，インドシナ総督から報告をうけたパリの植民省の発表として，マルローが盗掘の罪で３年の禁固刑を受けたことを報じる。その翌日の８月３日にはパリの４紙「コメディ」，「エクレール」L'Eclair，「ジュルナール」Le Journal，「マタン」Le Matin が，さらに８月５日には「非妥協の人」L'Intransigeant の「アンコール詣で」*Le pèlerin d'Angkor* の記事が，一層詳しい内容を報じた。客観的な報道がほとんどであったが，そのうちの「マタン」紙は，マルローを紹介するに際し，そのボヘミヤン的生活，独系ユダヤ女性クララとの結婚など，かなり反マルロー的語調であったので，後にサイゴンの反マルローの立場をとる「公平」紙が転載することになる。また，「エクレール」紙の記事「詩人アンドレ・マルロー，アンコールの寺院から略奪」*Le poète André Malraux pillait les temples d'Angkor* に対し，マルローをよく知るドワイヨンは，同紙の文芸欄責任者トレック

L. Treck に抗議の書簡を送った。この抗議書簡は，同紙8月9日号に「マルローに対する弁護」*Plaidoyer pour Malraux* という公開状の形で記載されるが，これがパリにおけるマルロー擁護の第一声となった。この後クララ夫人の救助活動も次第に成果が上りだし，著名な文学者が，若き仲間マルロー擁護の筆陣を張り始めた。まずマルローの最初の書『紙の月』*Lunes en papier*（1920）を捧げた文学の師とも言うべきジャコブが，ドワイヨン同様，「クレール」紙に書簡を送り，そこで若い才能あるマルローに対する寛大さと理解を述べて擁護した。この書簡は8月15日号のトレックの文芸時報欄に紹介された。続いてブルトンが「文芸ニュース」紙 Les Nouvelles Littéraires 8月16日号に「マルローのために」*Pour André Malraux* の一文を寄せ，そこで「慎重よ，さらば！……」で始まる格調高い名文で，マルローとその文学擁護の意志を表明した。こうした文学者の動きは，友人アルランの N. R. F. グループへの働きかけで，遂にマルロー救済の公開請願書の作成となり，23名の署名を集めた請願文として9月6日の「文芸ニュース」紙に発表された。請願文は次の通りである。

Les soussignés, émus de la condamnation qui frappe André Malraux, ont confiance dans les égards que la Justice a coutume de témoigner à tous ceux qui contribuent à augmenter le patrimoine intellectuel de notre pays. Ils tiennent à se porter garants de l'intelligence et de la réelle valeur littéraire de cette personnalité dont la jeunesse et l'œuvre déjà réalisée permettent de très grands espoirs. Ils déploreraient vivement la perte résultant de l'application d'une sanction qui empêcherait André Malraux d'accomplir ce que tous étaient en droit d'attendre de lui.

ANDRÉ GIDE, FRANÇOIS MAURIAC, PIERRE MAC ORLAN, JEAN PAULHAN, ANDRÉ MAUROIS, JACOUES RIVIÈRE, MAX JACOB, FRANÇOIS LE GRIX, MAURICE MARTIN DU GARD, CHARLES DU BOS, GASTON GALLIMARD, RAYMOND GALLIMARD, PHILIPPE SOUPAULT, FLORENT FELS, LOUIS ARAGON, PIERRE DE LANUX, GUY DE POURTALÈS, PASCAL PIA, ANDRÉ HARLAIRE, DESSON, ANDRÉ BRETON, MARCEL ARLAND.

「下記の署名者は，アンドレ・マルローに下された有罪判決に心痛める者であり，わが国の知的遺産の増大に貢献する者全てに対し，これまで裁判所が常に示めされてきた尊重の念に信頼を寄せるものである。また，その若さとすでに発表された作品を通じて，大いなる希望を寄せることの出来る当人物の知力と現実の文学的価値に対して，署名者は全幅の保証をするものである。さらにアンドレ・マルローに期待する万人の権利を満す妨げとなるべき処罰を氏に加えられることから生じる損失に対し，心からの遺憾の意を表わすものである。

署名者――アンドレ・ジッド，フランソワ・モーリャック，ピエール・マッコルラン，ジャン・ポーラン，アンドレ・モーロワ，ジャック・リヴィエール，マックス・ジャコブ，フランソワ・ル・グリ，モーリス・マルタン・デュ・ガール，シャルル・デュ・ボス，ガストン・ガリマール，レーモン・ガリマール，フィリップ・スーポー，フロラン・フェル，ルイ・アラゴン，ピエール・ドゥ・ラニュ，ギー・ドゥ・プールタレス，パスカル・ピア，アンドレ・アルレール，デソン，アンドレ・ブルトン，マルセル・アルラン」

この嘆願書は，法務大臣と内務大臣に提出された。

上訴裁判から帰国へ――

本国における文学者によるこうした動きの詳しいことを知らぬまま，9月23日，マルローらは上訴の裁判に呼ばれた。しかし弁護士の要請によって開廷は10月8日に延期された。

この間，サイゴンの「公平」紙は，反マルロー=シュヴァソンのキャンペーンを続けている。9月5日号のラシュヴロティエールの記事「遊惰な生活を送る男」*L'homme à la rose* は，8月3日号の「マタン」紙の記事の転載が中心であるが，マルローへの反感に満ちた経歴紹介の記事である。9月16号のアンコールの立像事件」*L'Affaire des statues d'Angkor* は，マルローへのインタヴューを載せたものであるが，その発言がゆがめられている。これに対し，マルローは抗議の書簡を送り，それが翌日

17日の「マルロー氏抗議す」*M. Malraux proteste* として記載される。しかしこの書簡の記載方法について，マルローはさらに抗議の書簡を送る。それは18日に「マルロー氏再度抗議す」*M. Malraux proteste encore* の形で載せられた。マルローはここで抗議をあきらめる。「公平」紙は，裁判に向けて反マルロー感情を煽る記事を続け，9月23日号に「マルロー=シュヴァソン事件」*L'Affaire Malraux-Chevasson* を載せる。しかし客観的な報道をする新聞もあり，「サイゴン通信」Le Courrier saïgonnais 紙は，9月25日号でカミーユ・ドゥヴィラールの「遺跡事件」*L'Affaire des ruines* を発表するが，マルローはその記事内容を信用し，裁判の開かれる数日前，同紙10月6日号に事件を説明する公開書簡を寄せている。

10月8日，上訴の裁判が開かれた。午前中は，判事ゴーダンによる事実報告と彫刻判定，午後は，検事代理モローが3時間に及ぶ論告を行う。マルローを主犯とし，大学研究員の肩書で植民大臣をだまし，不法に取得した物を父に与えようとし，また探検の成果を寄贈するという口実でフランス極東学院をあざむいた，と主張し，マルローに対して先の裁判における求刑の適用と市民権剝奪を求めた。被告弁護の論述は，翌々日の10月10日の午後に行われた。マルローの弁護士ベジァは，問題の彫刻の所有権はフランスにもカンボジアにもないので，盗掘という事実は法的に成立しない，と主張した。ついで，コーチシナで名高い弁護士であったガロワが，シュヴァソンの弁護に立ち，事件は様々な面から実際より誇張されており，これぐらいの行為は法的にみて政府関係者によっても行われていると考えられる以上，事件の真姿を正確に評価するべきである，と主張した。

10月28日に判決がなされた。判決は，マルローに対しては執行猶予をともなう禁固1年，シュヴァソンに対しては，同じく執行猶予つきの禁固18カ月とされ，彫刻の返還を命じた。無罪を主張していたマルローは，直ちに声明し，フランスにおいて最高裁に控訴する用意があることを告げた。

押収された彫刻は，1925年にフランス極東学院の手で行われたバンテアイ=スレイ寺院の修復の際，プノンペンの美術館からもとの寺院の壁に戻された。

上告裁判の一応の結論が出されたので，植民地政府によるマスコミ操作も自然終焉を迎えた。その中心的新聞であった「公平」紙は，裁判開廷の10月8日から「マルロー=シュヴァソン事件」*L'Affaire Malraux-Chevasson* という表題のもとに，9日検事論告，10日と11日弁護論述と，続けさまにキャンペーンを張っていたが，それも終わりを告げた。しかし，マルローと「公平」紙の闘いは，1925年のマルローの再度のインドシナ滞在によって，別の様相のもとに再燃することになる。

マルローとシュヴァソンは，判決の4日後の11月1日，午前6時，シャンティイ号でサイゴンを発ち，帰国の途についた。11月末にマルセイユに着き，直ちにパリに戻る。クララは別居中のマルローの母といっしょにモンパルナス駅近くのアパートに暮していたので，マルローもその近くのポルト・ドゥ・ヴェルサイユのアパートに独り身を落ち着けた。そして，まず裁判の際援助を受けた人々にお礼の訪問をして回った。

1923年10月から1924年11月に至る約1年2カ月のインドシナ滞在の大部分を占める法廷闘争の10カ月は，マルローに大きな影響を与えた。裁判を通じて植民地権力の不正義を実感したこと，植民地の不正にあえぐ諸々の現実を見たこと，さらに裁判の期間中のサイゴンやパリの新聞，またマルロー救済のための文学者と新聞の動きなど，ペンの力を認識したこと，恐らくこうしたことが原因と思われるが，マルローは，数カ月を経ずして，反植民地の思想に燃え，再びインドシナへ戦いの帰還をすることになる。また文筆家としても，直接ペンの力を発揮するジャーナリスム活動を開始すると共に，これまでの幻想文学から脱皮し，後に「世紀の証人」と呼ばれることになるような小説家マルローの道を歩み始めることになる。